

魚 類 防 疫 対 策

宇野悦央, 辻村明夫, 見奈美輝彦

平成4年1月から12月までの病害検査件数は計190件であり, 内訳はアユ184件, アマゴ3件 (連鎖球菌症, イクチオホヌス症, 水カビ病各1), コイ2件 (カラムナリス病, ダクチロギルス症各1) およびフナ1件 (トリコジナ症) であった。

養殖アユの病害検査状況を表1に示した。ビブリオ病は10件 (9経営体) で, そのうち

表1 養殖アユの病害検査状況

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
ビブリオ病		1 (1)	2 (2)	2 (2)		1 (1)	3 (3)	1 (1)					10*1 (10) [9]*2
連鎖球菌症								1 (1)	1 (1)				2 (2) [1]
冷水病	6 (5)	3 (3)	5 (5)	10 (6)	7 (4)	10 (4)	5 (3)		2 (1)	1 (1)		9 (8)	58 (40) [19]
シュードモナス病		2 (2)		5 (4)	5 (3)	7 (3)	4 (3)	4 (4)	4 (3)	2 (2)			33 (24) [10]
細菌性鰓病		2 (2)		3 (3)	1 (1)								6 (6) [6]
カラムナリス病									1 (1)				1 (1) [1]
真菌症	1 (1)	1 (1)	5 (3)	2 (2)	5 (4)	8 (2)	3 (2)	1 (1)	2 (1)	1 (1)		1 (1)	30 (19) [8]
寄生虫性疾病			1 (1)							2 (1)			3 (2) [2]
その他							2 (2)		2 (1)				4 (3) [2]
不明	1 (1)	3 (2)	6 (5)	3 (3)	3 (3)	7 (2)	2 (1)	3 (2)	3 (1)	4 (2)	1 (1)	1 (1)	37 (24) [10]
計	8 (7)	12 (11)	19 (16)	25 (20)	21 (15)	33 (12)	19 (14)	10 (9)	15 (9)	10 (7)	1 (1)	11 (10)	184 (131) [29]

*1 件数 *2 () 経営体数, [] 同実数

Vibrio anguillarum の血清型A型によるものが5件, 同C型によるものが5件であった。A型によるものは前年と同様に少なく, またC型によるものは例年並であった。分離された*V.anguillarum* 10株の薬剤感受性を表2, 3に示した。血清型A型, C型はともにスルファモノメトキシンに対して耐性であった。血清型C型はオキシリン酸に高い感受性を示したが, A型は7月以降の感受性が低く, かなり被害を受けた経営体がみられた。連鎖球菌症は8, 9月に2件 (1経営体) であった。冷水病は湖産アユの種苗入池 (12月) 後から7月までに多くみられ58件 (19経営体) であり, 件数, 経営体数は前年 (24件, 12経営体) と比べてともに増加した。水温と日間へい死

表2 ビブリオ病菌の薬剤感受性

No.	月. 日	血清型	SMM* ¹	OA* ²
1	2. 13	C	—	3+
2	3. 19	C	—	3+
3	3. 27	C	—	3+
4	4. 3	C	—	3+
5	4. 10	A	—	3+
6	6. 3	A	—	3+
7	7. 6	A	—	2+
8	7. 8	C	—	3+
9	7. 17	A	—	2+
10	8. 21	A	—	2+

*1 スルファモノメトキシン
*2 オキシリン酸

表3 ビブリオ病菌薬剤感受性の類別

薬 剤		血 清 型		計
SMM	OA	A型	C型	
—	3+	2	5*	7
—	2+	3		3
計		5	5	10

* 菌株数

率の関係を50例（前年12月から本年10月まで）について図1に示した。発生がみられた水温は

14～20℃であり，中でも16～19℃で

発生が多い傾向にあり，へい死率もそ

の水温で高い場合がみられる。シュ

ードモナス病も前年（30件，9経営

体）と同様に多く33件（10経営

体）であった。細菌性鰓病は2～5月に6件（6経営

体）であった。真菌症は30件（8

経営体）で前年（18件，7経営体）

より増加し，内訳は水カビ病15件，胃

鼓脹症10件，真菌性肉芽腫症4件，

内蔵真菌症1件であった。寄生虫性

疾病は3件（2経営体）で，内訳はギロダクチルス症2件，グルゲア症1件であった。両疾病は魚の

状況から現場で業者自らがほぼ診断できるため，実際の件数はこれより相当多いものと推察され

る。その他は4件で，過食によると思われるものであった。また，不明は前年よりも増加傾向

がみられ，へい死魚の症状は鰓蓋下部の出血を伴う場合が多かった。

以上のように，平成4年は29経営体（延べ131経営体）において184件の発生がみられ，疾病別

では冷水病とシュードモナス病が多かった。

魚類防疫対策事業に係る防疫会議は11月27日（有田市）に，また養殖魚巡回健康診断及び防疫

対策定期パトロールは平成3年4月から平成4年3月までに計31回実施した。養殖アユを対象とした

医薬品残留検査は7～8月にオキシリン酸30検体について行い，すべて残留は認められなかった。

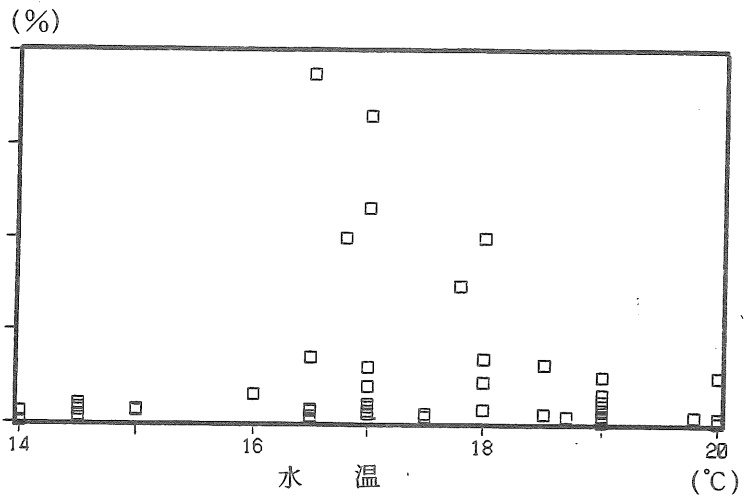


図1 冷水病の発生水温とへい死率の関係